

# 日刊 動労千葉

83. 8. 17

No.1419

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八 (動力車会館)  
(鉄電)二五三五(六・公衆)〇四七二(22)七二〇七

# 「たたかひの総括」を正当化する「裏切りと屈服」

## 動労「本部」革マルこそファシストだ 全国大会方針を弾劾する

動労「本部」一九八三年度「運動方針」の「主なたたかひの総括」の中での特徴点は、「冬の時代だから闘うべきではない」との情勢分析にたち、それゆえに敵の攻撃に屈服し、とりわけ国鉄内ではこの一年間、あらゆる権利を売り渡してきた自らの屈服と裏切りをタナにあげ、反戦・反核の闘いの高揚に敵対し、反撃にたちあがった国鉄労働者を「挑発者」として誹謗、中傷し、「たたかひ労働戦線の統一」革マル党づくりによる産業報国会運動の推進を明確にしていることです。

「権力は万能」だから  
「勝てない。闘うな」と主張

すなわち、  
「国家権力の意志のもとで国鉄再建委が発足」、  
「政府・支配階級の賃金抑制政策が貫徹され」、  
「政府・支配階級は徹底して行革攻撃」などという文章の乱用を見るまでもなく、「権力は万能で強大であり、たたかひでも勝てない」という敗北主義に貫かれ、労働者としての怒りや闘う気力の一カケラも見ることができません。

それは、「57・11ダイ改」の総括に特徴的にあらわれており、「当局の対応が変化し当事者能力を大きく喪失」とか「彼我の力関係を捨象して国鉄当局にたちむかって、自らを認めさせようとしても全く不可能」などと、「情勢が変った」なるペテンを理由に「闘わない」、「裏切っても仕方ない」ことを正当化しています。

権利が剥奪されたのは国労!!  
挑発者の責任と主張する動労「方針」

それでは、動労「本部」革マルが「正しかった」と評価する昨年八二年度の裏切りについて、どう総括しているのかを、「方針(案)」の文章を追って暴露してみよう。

◎ 57・11ダイ改問題……前述の認識にたち、「『職場と仕事を守る』働かざることを主軸に……労働運動の後退局面における対応として判断(裏切った)した……十余年にわたる取り組みで新幹線の北の拠点八支部を結成した」なる新幹線万才正義。

◎ ブルトレ問題……「返済は、当局の基本的態度が固く攻撃を拡大させないための取り組みであり、現在の政府・自民党、当局の攻撃の質は、裁判闘争などで阻止できるものではない」。

◎ 現協問題……「こんにちの情勢のもとでは、これ以上の前進はないと判断」。

◎ パス問題……「マスコミにあげ足をとられた国労が国鉄労働者の首をしめる役割を果たした。入浴問題……「地方対応のなかで一定の合意をつくりだして権利と労働条件を守ってきたが、国労がひき出した当局の回答は労働条件を一層改悪し、権利を完全に剥奪してしまうことを具体化させてしまった……労働攻撃を大きくよびこむ挑発者としての役割を果たした」。

労働者人民の力を軽べつする  
動労「本部」革マルこそファシストだ  
「たたかひの総括」の中の「共闘関係」の項で、「産報化への道が完成」、「春闘の敗北、惨敗、終えん」、「日本労働運動の崩壊的危機」、「四組合共闘は否定的状況」など、自ら闘う主体的立場を放棄したうえで社会党、総評、国労に責任転嫁しています。

特に、国労に対し、「動労への『陳謝』どころか組織破壊攻撃を強めている」とし、「全労から批判と強い危惧」などと職能連合を呼びかけています。

さらに「反戦・反核・反原発のたたかひ」の項では、「右翼・暴走族・番長・スケバンは、ファシズム運動を下ささえするもの」、「反核・軍縮運動の非労働者性・無力性」、「反核運動は統一丁だに削減できない無残な結果に終わった」などと、支配者の立場から労働者階級人民の力を無視、さげすんでいます。このような動労「本部」革マルこそファシストです。

今、全世界の反戦・反核・反帝闘争は、強力に発展しています。動労「本部」革マルの「無力」などという言葉とは裏腹に、八二年の反戦・反核闘争の高揚を切りひらき、けん引したこそ三里塚勢力です。八三年秋の反戦・反核・三里塚、そして国鉄労働者の闘いの爆発で、動労「本部」革マルに路線的破産をつきつけ追放・一掃を実現しようではありませんか。

(以下次号につづく)